

内容紹介

福島原発事故と大津波は、被災地の日常だけでなく、神社の祭りなど伝統行事も奪った。古里を追われ、たどり着いた避難先で必要なのは土地の記憶だった。豊漁と海上安全と豊作を願う浪江町「安波（あんば）祭」の、女子だけで踊る伝統芸能「請戸（うけど）の田植踊」がいち早く復活した。南相馬・村上の「道化の馬」は会場を笑わせた。衣装と道具を整え、戸外の放射線に神経をとがらせながら、多くの避難者を元気づける「田植踊」の復活・保存に尽力する女性らの熱い思いと取り組みを丁寧に追う。

初出

朝日新聞 二〇一三年七月四日～七月十八日

目 次

- [第1章 あの時と同じように](#)
- [第2章 宮司になってほしい](#)
- [第3章 私は足かせですか？](#)
- [第4章 あの子たちはどこに](#)
- [第5章 供養と復興のために](#)
- [第6章 意を決して、歌った](#)
- [第7章 放射能にビリビリ](#)
- [第8章 「帰りたい」と祈願](#)
- [第9章 こんなにできるんだ](#)
- [第10章 「馬の頭」見つけた](#)
- [第11章 原発作業員、45年](#)
- [第12章 客を笑わせた道化](#)
- [第13章 200の芸能の危機](#)
- [第14章 原葬に追われたのに](#)
- [第15章 やれることをやろう](#)

第1章 あの時と同じように

2013年2月17日午後、福島県浪江町請戸（うけど）。津波で流されたくさ野（くさの）神社の社殿跡に、白い防護服の女性が向き合った。

横浜市の倉坪郁美（くらつばいくみ）（41）。いま、くさ野神社の宮司を務めている。

社殿跡には小さな社（やしろ）が建てられ、おさい銭が積まれていた。傍らに玉串やお神酒を置く。祝詞（のりと）を書いた紙を取り出し、読み始めた。

「死者、行方不明者の御霊（みたま）を鎮め」

「放射性物質を取り除かしめたまえ」

「清き麗しき、もとの古里に立ち返らしめたまえ」

「かしこみかしこみ申す」

郁美は境内の裏手に接する実家で生まれ育った。

父の鈴木澄夫が宮司だった。11年3月11日の大津波で澄夫と母の照美、長姉弥生が亡くなった。禰宜（ねぎ）だった弥生の夫は行方不明のまま。福島第一原発から6キロしか離れていないため、直後の原発事故で地区ぐるみ避難させられた。津波後の捜索も十分にはできなかった。

毎年2月の第3日曜日が神社の例大祭「安波祭（あんばさい）」で、2月17日のこの日もそのはずだった。

安波祭は豊漁と海上安全、豊作を願って行う。彩りを添えたのが「請戸の田植踊（たうえおどり）」だ。請戸小学校の4～6年生が社殿前で踊った。

神社で踊ったあと、子どもたちは住宅や商店が並ぶ請戸の通りを練り歩いた。家を回り、田園を抜け、海に進む。海辺には神社の「御仮屋（おこや）」が設けられ、そこでも踊った。

毎年毎年、その日の請戸は終日にぎわった。

郁美は周りを見た。一面、自分の背の高さほどもある枯れ草に覆われている。壊れた家や津波で打ち上げられた船がぼつぼつと残っているほかは、周囲に何も無い。人の姿は同行の次姉夫婦だけだ。

ほぼ同時刻、佐々木繁子（ささきしげこ）（63）は請戸の子どもたちと二本松市の仮設住宅で田植踊を披露していた。二本松には請戸の避難民が多い。

田植踊は震災5カ月後に復活していた。ほかのどの地域よりも動きは早かった。郁美と佐々木は数日前、電話で連絡を取り合った。合言葉は「安波祭のときと同じようにやろうね」だった。

第2章 宮司になってほしい

倉坪郁美は震災翌年、2012年の2月19日にも祝詞（のりと）をあげた。

浪江町請戸のくさ野（くさの）神社社殿跡、小さな社。慰霊祭の位置づけで、町や神社本庁、県神社庁からも関係者が出席した。郁美が父の鈴木澄夫の後任宮司に就任した報告も兼ねた。

津波にさらわれた長姉と母は11年4月下旬、澄夫は7月に遺体が見つかった。原発事故のため、捜索は4月中旬に入ってからだった。

9月、次姉の住む仙台市で両親の葬儀を営んだ。葬儀後のなおらいの場で、郁美は数人の氏子から「宮司になってほしい」と頼まれた。

宗教法人の手続き上、澄夫が亡くなると、神社を存続させるためには新たな宮司の登記が必要になる。

適任者としては、神職の資格を持つ郁美しかいなかった。

郁美は3姉妹の末っ子だ。県立原町高校を卒業後、米国の南イリノイ大学カーボンデール校に進み、異文化コミュニケーションを学んだ。

末っ子なので進路は自由に決められた。くさ野神社はいつでも帰れる「ふるさと」だった。永遠にそこにあるという安心感があった。だからこそ、接したことのない世界を見てみたいと米国行きを決めた。

ところが、米国で逆に日本文化に興味を持った。実家の神社にこそ日本文化があったんだと気づいた。

日本に戻った2000年に長姉と次姉の結婚話があった。神社を誰が継ぐか、悩ましい問題だった。就職直前の郁美が手を挙げ、とりあえず神職の資格を取った。

郁美も3年後に結婚し、横浜市へ移り住んだ。だがその後も安波祭（あんばさい）の時期は里帰りして手伝った。「両親が一生懸命守ってきたものを大事にしたかった」からだ。

宮司になってくれと頼まれて、郁美は困惑した。自分は横浜に嫁いだ身、再び福島に移り住むことは難しい。とはいえ何もしないと神社が消滅してしまう。

悩んだ末、「宮司になれば、請戸が復興に進むきっかけになる」と信じて就任を受け入れた。そのうえで臨んだ慰霊祭だった。しかし.....。

慰霊祭後、「引き受けるからには福島に戻ってほしい」「宮司に就任するなんて聞いていない」「就任を認めたくない」などの声が耳に入ってきた。少なからぬ氏子が郁美の宮司就任に反対していた。

郁美は驚いた。

氏は県内外に避難している。話し合いをする時間が十分に取れず、もどかしかった。

第3章 私は足かせですか？

2012年6月、倉坪郁美は二本松市に出向いた。氏子と話し合うためだった。

神社の会計が話の中心だったが、郁美は意見をいわずにはいられなかった。福島に住んでいないことや根回しがなかったことなどを理由に、自らの宮司就任に反対する声が聞こえてきていたからだ。

「私、皆さんの足かせですか？」

結局、適任者が現れるまでは郁美が宮司を続けることになった。

郁美の悩みは深かった。

唐突に肉親を失い、神社の運営もしなくてはいけない。神社にかかわっていいのか、嫁ぎ先への遠慮もあった。神社の仕事と家事と、どちらも十分にできていない気がした。

続けるべきか、やめるべきか。

頭に浮かんだのは、くさ野（くさの）神社を支えてきてくれた浪江町請戸の人たちのことだった。氏子の人々、田植踊の子どもたち――。

田植踊は11年8月21日、いわき市の公演で復活した。郁美はそれを客席で見た。安波祭（あんばさい）のときと同じ衣装、道具で、化粧をした子どもたちが懸命に踊っていた。

「あの子どもたちを困らせることになってはいけない」

郁美はそう思って神社の仕事を続けることに決めた。

田植踊を復活させた佐々木繁子の存在は心の支えだった。

佐々木は福島第一原発から3キロの距離にある大熊町夫沢（おつとざわ）に生まれた。20歳で請戸に嫁ぎ、建築業だった夫が震災の3年前に亡くなってからは一人暮らしを続けていた。

田植踊にかかわるようになったのは20年以上も前。当初は踊り手だったが、その後歌い手になり、子どもたちを指導する側になった。

浪江町でホテルに勤めていて、原発事故で避難した。東京から迎えに来た長男と数日後に落ち合い、東京都小平市の姉の家に入った。

同じく避難中の次男、三男一家と一緒に過ごしていたが、「甘えてはだめだ」と、11年4月中旬から一人暮らしを始めた。都が避難者住宅として国から借り上げた江東区の国家公務員宿舎「東雲（しのめ）住宅」に入った。

東雲住宅は36階建て。震災後、1千人を超える避難者が居住した。12年10月に郡山市に移り住むまでの1年半を、そこで過ごした。

佐々木の部屋からは首都高速や東京スカイツリーが見えた。田園が広がる請戸とはあまりにも違った。

自分の生活を考えると不安はつきず、涙を流した。

第4章 あの子たちはどこに

佐々木繁子（63）が入居した東京都江東区の国家公務員宿舎には、浪江町請戸の住民がほかに2世帯入居していた。

2011年4月、入居説明会の場で再会してわかった。一緒に田植踊を踊った女性もいた。彼女と請戸の話をいろいろとしたかったが、気兼ねして頻繁には出向けなかった。佐々木と違い、相手は家族で住んでいたからだ。

東京での暮らしには違和感が多かった。知り合いを見つけようにもエントランスの郵便受けには名前がない。だれがどこに住んでいるのか、さっぱりわからなかった。

週に3日、小平市の姉の家がやっているクリーニング店を手伝いに行った。半面、手伝いに出ない日は部屋へこもりがちになった。

電話をかけては請戸時代の友人、知人の消息を探った。亡くなったと知っても、よほど近い人でないと葬儀や供養のために福島まで出向くことは難しかった。

夫が亡くなったとき、長男からは「仕事と生きがいを見つけて、地元に貢献できるようなことをしたらどう？」といわれていた。

原発事故はその2年後だった。請戸から避難させられ、東京に来た。大都会の一人暮らしで、佐々木は不安に押しつぶされそうだった。夫の三回忌もできなかった。

数週間そんな生活を続けているうち、佐々木の脳裏に安波祭の情景が浮かぶようになった。田植踊を踊った子どもたち。あの子たちはどこにいるのだろう、と。

請戸小学校の児童は全員が助かったと人づてには聞いていた。だが、だれがどこに避難したかはわからなかった。

11年の安波祭は大震災の19日前だった。

田植踊のあとは毎年、踊り子の子どもたちが神社の前に整列して写真を撮る。佐々木は毎年、その写真を子どもたちに送っていた。

この年の整列写真は、残念ながら津波で流されていた。しかし、と佐々木は思った。整列の光景を撮っていたのは自分たちだけではない。アマチュア写真家など、多くの人が撮っていたはずだ。

写真の提供をマスコミで呼びかけられないものだろうか。

5月、佐々木は福島県内の全テレビ局に電話をかけた。

「写真を撮った人、いませんか」と呼びかけてもらおうとしたが、色よい返事はなかった。

第5章 供養と復興のために

田植踊の子どもたちの写真提供を呼びかけたい。

テレビ局への依頼が空振りに終わったあとも、佐々木繁子はあきらめなかった。「まだ新聞がある」

浪江町請戸の自宅で購読していた福島民友新聞に電話してみた。電話口の記者に説明すると、「載せます。大丈夫ですよ」。3日後、社会面に佐々木の記事が載った。

見出しはこうだった。

「安波祭の写真提供して 浪江から避難の佐々木さん 津波で流失／協力訴え」

反響は大きく、福島民友新聞を経由して写真がたくさん届いた。

佐々木はうれしかった。

記事掲載から約10日後、佐々木に一通の手紙が届いた。差出人はいわき市平菅波（たいらすぎなみ）の大国魂（おおくにたま）神社宮司、山名隆弘（やまなたかひろ）（71）だった。

「新聞で佐々木様のことを知りました。鈴木宮司さんともおつきあいしてきました」

津波の犠牲となったくさ野（くさの）神社の宮司、鈴木澄夫と山名は国学院大の同窓生だった。

山名の手紙は田植踊について書かれていた。

「とてもいい芸能と聞いております。どうぞ希望をもって下さい」

踊りを収録したビデオを提供します、ということも書かれ、最後をこう結んであった。

「8月にいわきで田植踊を皆に見てもらおうかと計画しています」

8月に踊る？ 到底無理だ。佐々木は驚いた。同封されていた名刺の番号にすぐ電話した。

手紙の礼を述べたあと、佐々木は山名に説明した。

「せっかくのご提案ですが、津波で衣装も道具も写真も、何もかも流されてしまったんです。原発事故で浪江に戻ることで難しいし」

率直な胸のうちも明かした。

「これだけ多くの人が浪江から避難して、津波で肉親を亡くした人も多いのに、田植踊なんかやっていていいんでしょうか」

山名は即答した。

「こんな時だからこそやった方がいい。亡くなった方の供養になる。請戸の復興にもつながります」

山名は「避難者の心の平静にもつながると思います」ともいった。不安な避難生活を過ごす佐々木にとって、励まされる言葉だった。

佐々木の心が揺れた瞬間、山名は思いがけないことを口にした。

「『相馬流れ山』を歌ってくれませんか」

第6章 意を決して、歌った

「相馬流れ山」は福島県浜通りの代表的な民謡だ。田植踊のとき、佐々木繁子も請戸流に変えて歌っていた。いわき市の宮司、山名隆弘に電話口で歌うよう求められ、初対面でもあつて佐々木は少し困った。

23階の佐々木の自室は、携帯電話の電波が届きにくい。山名への電話も電波が通じる1階まで下り、通用門から屋外に出てかけていた。

入居者が行き来する場所だ。人通りがなくなったのを見計らい、意を決して大声で歌った。

「相馬流れ山ナアーエ 習いたかござれナアーエ 五月中の申(さる)ナアーエ あのさお野馬追いナアーエ……このくらいでいいですか」

山名は「いやあ、いいなあ」と何度も繰り返しいった。改めて、8月にほかの民俗芸能とともに浪江町請戸の田植踊を披露するよう求めた。

佐々木は田植踊を伝承する請戸芸能保存会の副会長だ。復活するにしても自分だけでは決められない。いったん返事を保留した。

会長の渡部忍(わたなべしのぶ)(63)と行政区長に電話をして山名の提案を伝えると、2人とも「子どもたちがやりたいというなら、やったらいいべ」。

やる方向で進もうと決めた。

佐々木に提案する前、山名は福島県の民俗芸能を調査している懸田弘訓(かけたひろのり)(75)に協力を求めている。

懸田は「請戸の田植踊は洗練されている。なくしちゃいけない」と、二つ返事で協力に応じた。

山名も懸田も、元県立高校の教師だ。懸田は神職の資格を取らなかったが、宮司の家に生まれ育ったのも共通している。

伊達市靈山町の実家に雅楽器があつたことから、懸田は音楽に興味を持ち、音楽の教員免許を取った。童謡や民謡に魅せられ、祭りや民俗芸能の調査研究を始めた。

山名とは県の教育委員会で文化財の仕事を一緒にした仲だ。請戸には震災前、何度も足を運んでいた。

請戸の田植踊は女子だけで踊る。女役の「早乙女」と男役「才蔵」、手持ち太鼓を打つ「中打ち」の3パート。必要なのは16人だが、震災19日前の安波祭は13人でやった。

佐々木はその13人に連絡を取ることにした。請戸小学校の教員に協力してもらい、手紙を出した。

「8月にいわき市で田植踊を披露できるお話をいただきました。みなさんは参加しますか」と書いた。

全員から同じ返事がきた。

「参加します」

第7章 放射能にビリビリ

2011年8月21日、いわき市の水族館、アクアマリンふくしま。

特設ステージに浪江町請戸（うけど）の子どもたちが並んだ。

山名隆弘が企画した「民俗芸能公演」だ。田植踊の舞台上がったのは請戸小学校の児童13人に、卒業生を加えた計19人。

この日に向け、佐々木繁子が頭を悩ましたのは衣装だった。

山名は「衣装はそろわなくても仕方がない」といったが、佐々木はなんとかそろえたかった。

震災前、衣装を新調するために浪江町を通して補助金を申請していたのを思い出した。佐々木は町と掛け合い、OKをもらった。7月2日、町役場が移転している二本松市の呉服屋に飛び込んで頭を下げた。

「原発事故の被災者です。民俗芸能を絶やさないように、今度復活公演をやります。着物が必要です。今すぐにはお金がありません。時期は遅れますが、必ず費用は払います。つくってもらえませんか」

呉服屋の協力を得て、1カ月後に着物ができあがった。

流された道具の新調と修理も、間に合った。太鼓はがれきの中にあった。皮が破れていたため、石川県の業者が無償で修理してくれた。

初練習は7月3日だった。二本松市の公共施設に全員が集まった。

メンバーの柴綾花（しばあやか）（15）は「とにかく請戸の人たちに会えたのがうれしかった」と振り返る。

みんな笑顔だった。付き添いの保護者は「震災後、初めて子どもが笑ってくれた」と涙を流した。

一方で、こんなことがあった。

練習は始まったが、部屋が狭かった。佐々木が「外の広場でやろうか」といって建物の外に出ようとしたとき、雨が降ってきた。

「佐々木さん、お願いだから外ではやらないで！」

数人の母親が一斉に声を上げた。放射能を恐れたためだった。

「東京に早くから避難してしまったので中通りの放射線量の高さに気が回らなかった。無神経だった、とショックを受けました」と佐々木はいう。「それだけ、みんなが放射能にビリビリしていたんです」

多くの人の思いがこもった8月21日、本番。しかも上がるのは大きなステージだ。請戸の祭りとは勝手が違う。佐々木も子どもたちも、緊張感でいっぱいだったのだが.....。

子どもたちは立派に踊りきった。

観客席から大きな拍手がわいた。

第8章 「帰りたい」と祈願

2011年8月の復活後、田植踊をする浪江町請戸（うけど）の芸能保存会には次々と出演依頼が入った。

13年5月には、島根県の出雲大社であった60年ぶりの遷宮行事にも出演した。18回目の公演になった。

このときの踊り手は6歳から15歳までの14人。

本来の踊り手は小学生で、卒業生と一緒に踊ることはない。だが、避難中とあって参加できない子どもも多く、年齢層は広がっている。

高校1年の柴綾花は、踊り手の最年長だった。

出雲大社で踊ったとき、「請戸に帰りたい」とお祈りした。祈りながら、「放射能があるから無理だろうな」とも思っていた。

大震災が起きた11年の3月11日、綾花は浪江町請戸の自宅に1人でいた。町役場に避難し、夜になってそこで家族と合流した。

12日朝、役場職員が「放射能が危ない、逃げてください」と声を張り上げていた。町を出て、南相馬市原町区の祖父母宅に避難した。

12日午後、1号機爆発で南相馬を脱出する。川俣町、会津若松市と避難を続け、4月1日に二本松市東和（とうわ）地区の集合住宅へ落ち着いた。新学期から中学2年だった。

毎朝起きると、山あいの田園風景が目の前にあった。請戸は海べりなので、違和感は大きかった。請戸の友だちが同じ中学校に通うと聞いていたが、だれも来なかった。

「東和での生活に慣れるのが本当に大変で、中学生生活は勉強も部活動も、満足にできなかった」と綾花はいう。「中学2年生って、一番楽しい時期だと思ってたんですよ。高校受験はまだだし……」

この4月、二本松市にある県立安達高校に入った。吹奏楽部でフルートを担当する。勉強もしなくてはならないし、忙しい毎日だ。

5月の出雲大社行きは中間テストを控えた忙しい時期だった。悩んだが、踊り手が欠けると迷惑をかけてしまうと考えて参加した。

綾花は、手持ち太鼓をたたきながら動いて踊る「中打ち」2人のうちの1人で、背格好のバランスを考えると代役がいらないのだ。

いま、請戸は避難指示解除準備区域になっている。帰還困難区域と比べれば放射線量は低いが、町は15歳未満の子どもの区域への立ち入りを認めていない。

綾花は9月で16歳になる。

いずれ機会があれば、請戸を見に戻りたいと思っている。

第9章 こんなにできるんだ

2011年8月の復活後、浪江町請戸（うけど）の田植踊はさまざまな場で披露され、被災者を元気づけた。

公演回数は、5月の出雲大社で18回目。12年1月の公演は福島駅の駅ビルが会場だった。

客席に南相馬市小高区村上の岡和田（おかわだ）とき子（62）がいた。

ステージを見ながら、岡和田は驚いていた。津波で被害を受けたはずなのに、請戸の子どもたちは華やかな衣装と道具をそろえている。避難先もばらばらだろうに、踊りもそろっていて完成度が高い。

「こんなにちゃんとできるんだ」

岡和田が住む村上地区にも田植踊と神楽が残っている。

岡和田は田植踊の歌い手を務める一方、保存会の事務局も担当していた。請戸の田植踊が復活したことを知り、その姿をぜひ見ておきたいと思って会場に足を運んでいた。

村上でも復活させたいな、とおぼろげに考えていた。この日の舞台を見てその気持ちが高まった。

請戸と同じく、村上も海沿いにある。大津波で全75戸のほぼすべてが全壊、住民の2割が亡くなった。福島第一原発からは16キロの距離で、今も全戸避難が続いている。

地区の高台、村上城跡に貴布根（きぶね）神社があり、田植踊はそこに奉納されていた。4月23日の春祭り、踊るのは1年おきだった。

男役「弥八」と女役「早乙女」という踊り手が田植えを表現し、手持ちの太鼓をたたく「中打ち」も踊る。弥八が「万祝（まいわい）」という漁師の晴れ着を着るのが請戸と違う特徴だ。

最年少が３０代で、踊り手の高齢化が進んでいた。が、地区全体で踊りを伝承してきた自負があった。請戸の田植踊は村上から伝わったという伝承もある。復活した請戸の踊りを見ながら、岡和田の脳裏に津波で亡くなった先輩たちの顔が浮かんだ。復活させたい、そう思った。

数週間後、岡和田が避難する福島市内の自宅を、民俗芸能の被災状況を調査中の懸田弘訓が訪ねた。

懸田は「ぜひ村上でも復活させてほしい」と力説した。

岡和田も気持ちは同じだ。しかし田植踊の保存会は、震災前にいた３９人のうち会長と副会長を含む１２人が津波で亡くなった。衣装も道具も流失した。直後の原発事故で、住民は散り散りになっている。

「何もなくなっちゃったんです」という岡和田に、懸田は「補助金制度もある。お金のことならなんとかなる」と助言した。

第10章 「馬の頭」見つけた

2012年2月下旬、南相馬市の道の駅に小高区村上の田植踊保存会のメンバーが集まった。

田植踊の復活が議論になった。

村上の田植踊は、地元の婦人会が中心になって引き継いでいた。話し合いの結果、意見は一致した。

「先輩がやってきたんだから途中でやめられない。やってみよう」

3月の地区総会でも議論した。

「こんなときに踊っていていいのか」との意見も出たが、結論は「長く続けてきた踊りだ。やろう」となった。地区の総意として、田植踊の復活が決まった。

津波で流失した衣装や道具は新調することにした。踊りに先立って披露される「道化（どうけ）」の道具だけは、一部ががれきの中に残っていた。

道化は田遊びともいえる内容で、馬を使った田植えの様子を5人の男性が表現する。おどけたしぐさで、2人が馬に扮する。そのときに使う馬の頭の部分だけが残っていた。

見つけたのはとび職人の橋本尉記（はしもとやすのり）（71）だ。自ら道化を演じる。

小高区は11年4月22日から原発事故の警戒区域になり、立ち入りができなくなった。新潟県三条市に避難中だった橋本は、立ち入り禁止になる前日、自宅付近の様子を見に行って馬の頭を見つけた。貴布根神社のある高台の近くだった。

「ああ、流されなかったんだ」とうれしくなったが、土台しか残らなかった自宅近辺の様子を確認することで精いっぱいだった。「取ってきて作り直そう」となったのは、田植踊の復活が決まったあとだ。

12年6月、身を落ち着けていた南相馬市鹿島区の仮設住宅から馬の頭を取りに行った。震災からはもうずいぶん時間がたつ。元の場所にあるのか不安だったが、少し離れたがれきの集積所にあった。軽トラックの荷台に乗せて持ち帰った。

頭はべしゃんこに潰れていた。

竹かご状になっている頭の内部を何度も作り直した。修理のためだけにミシンと糸、針を自費で買った。がれきの中から馬に合う色の敷布を見つけ、胴体をつくった。汚れを取ろうと何度も洗い直した。

狭い仮設生活で、馬の修復はちょっとした生きがいになった。

「村上の生活を思い出す数少ない物だから感動したんだ。『年金取り崩して無駄なもん買うなんて』ってかあちゃんには怒られたけど」

「道化の馬」は2カ月後に完成し、12年10月の復活公演で使われた。

第11章 原発作業員、45年

南相馬市小高区の村上は、もともと半農半漁で成り立っていた。

ただ、港がなかった。小舟を砂浜に上げておき、漁のときはそれを海に押し出す。そんな漁業だった。

漁業は次第に衰退し、半農半漁での生活が難しくなった。

「道化の馬」を修復した橋本耐記（やすのり）も、代々半農半漁の家に生まれた。漁業の衰退で県立小高工業高校に進学、卒業後は水道工事の傍ら東京へ出稼ぎにも出た。「地元で働くところなんてなかったし」

そこに降ってわいたのが、福島第一原発の建設だった。

村上から第一原発は近い。多くの住民が働きに行った。橋本は原発の工事現場に行って直談判し、作業員の仕事を得た。建屋をつくる際の足場や鉄骨の組み上げだった。

「村上の住民の3分の1ぐらいは原発で働いていたんじゃないかな」と橋本は記憶している。

日当は帰りの送迎バスの中で、親方からもらった。8時間働いて500円。半世紀も前の話だ。当時、一般企業が300円ぐらいだった。

休みは日曜日しかなかった。懸命に働いた。第一原発が完成すると第二原発、広野火力発電所と、発電所の建設工事に携わった。

40歳を過ぎると、原子炉建屋内での仕事をするようになった。

主な作業は、定期検査で原子炉が停止したあと、圧力容器内の各種作業に必要な足場を組むこと。

高温の中、放射性物質がつかないように防護服とカッパ、ゴム長靴、ゴム手袋で作業した。

すぐに線量計のアラームが鳴ってしまうため、作業時間は1時間。作業後、長靴をひっくり返すと、ざっと水が出た。大量の汗だった。

「高線量の場所はいやだったけど、生活のために仕方がなかった。はじめはおつかなびつくり。しばらくすると慣れてしまった」

2010年夏までの45年間、橋本は原発作業員を続けた。

移動式クレーンの運転、地山の掘削、型枠組み立て……十数種の講習を受けて技術を身につけた。「代役のきかない仕事をやれば、少しでも長く続けられると思ってね」

現場から離れ、1年もたたないうちに東日本大震災が起きた。

津波で家を流されたショックも大きかったが、原発の爆発、放射性物質の飛散はそれ以上の衝撃だった。

「放射能が生活の場にまで及ぶとは……。絶対に安全だと言い聞かされてきたからね」

第12章 客を笑わせた道化

2013年6月8日、東京・国立劇場の舞台に南相馬市村上地区の住民23人が並んだ。

全員の衣装がばりっと新しい。歌い手がスカイブルー、早乙女と中打ちの赤い帯、弥八は黒い万祝（まいわい）……。これから田植踊を上演するのだ。村上の田植踊は12年10月に復活、国立劇場が復活後4回目の披露だった。

この日は福島県の民俗芸能が七つ集められていた。村上の出番は2番目だ。

田植踊は「道化」から始まる。

頼りなげな笛と小太鼓の音に乗り、馬を引き連れた夫婦が登場した。馬の後ろに代（しろ）かきの道具がついている。馬はおぼつかない足取りで、ふらっと倒れたり、代かきの最中にふんをしたり。ユーモラスな動作をするたび、客席から笑いが起きる。歌い手として舞台にいる岡和田とき子も笑みを浮かべている。

田植えを始めると、田に筋を引きながらずっこける。ひょうたんから酒を飲もうとしたら中身がない。会場を笑わせながら、昔懐かしい田植えの様子を表現していく。

道化を演じたのは5人。西内芳幸（にしうちよしゆき）（65）は4月から参加した。

踊り手や歌い手として田植踊に積極参加していたのは、妻のヤス子だった。西内はその姿をカメラやビデオに収める役を務めていた。

西内の自宅は海岸から100メートルの場所にあった。貴布根（きぶね）神社のある高台の下だ。

11年3月11日の震災時、自宅にはヤス子と叔母がいた。

西内は原町区の勤務先にいた。車で自宅を目指す途中、黒く高い壁のような津波を目撃する。陸地が海のようになり、自宅には戻れなかった。戻れないまま、原発事故のため翌日には避難させられた。

4月に遺体捜索が始まり、やがてヤス子と叔母の死が確認された。ヤス子はDNA鑑定で6月に身元が判明した。西内は現実を受け入れられず、何もやる気が起きなかった。

西内を田植踊に引っ張り出したのは保存会の会長、中島久尚（なかじまひさよし）（78）だった。国立劇場での公演が決まった12年3月、西内に「参加してくれないか」と電話をかけた。年配の会員が引退するから、という理由だった。「妻がやっていたし、困っているなら」と西内は引き受けた。

国立劇場の舞台上で、西内の表情は硬かった。緊張していた。

終わったあと、やっと表情をゆるめた。「一生懸命やった。熱意、伝わればいいんだけど」

2013年6月、南相馬市村上の人たちが出演した国立劇場の舞台に、元高校教諭の懸田弘訓（かけたひろのり）（75）がいた。

懸田はマイクを握り、壇上に並ぶ村上の踊り手たちを紹介した。

「メンバーには身内の方を亡くされた方が多くいらっしゃいます。村上は七十数戸のうち、ほとんどが土台を残し、津波で流されてしまったんです。保存会の方も39人中12人が亡くなっていらっしゃるんですね」

そんな状態に陥った村上が田植踊を復活した。懸田の紹介に、会場からは大きな拍手が送られた。

伊達市霊山町の宮司の家に生まれた懸田が民俗芸能に関心を持ってから50年がたつ。福島県内各所を回ると、県内に1200種の民俗芸能が残っていることが分かった。このうち毎年、または1年おきに定期的に披露されるのは800種だった。

震災後、それらの芸能がどうなったのか心配になった。

震災2カ月後、自費で調査を始めた。住民がすべて避難した地域もあるし、道具類が放射能を浴びて使えなくなった民俗芸能もある。住民避難や放射能汚染、津波。さまざまな要素を勘察し、高濃度の放射能汚染があった地域で計200種の民俗芸能が消滅の危機にあると推定した。

震災半年後の11年9月、文化庁の補助で本格調査をすることになった。13人の調査団で、団長が懸田だ。12年1月に調査を始め、3年度計画でいまま聞き取りを続ける。

調査団が動き出したとき、浪江町請戸の田植踊はもう復活していた。懸田もそれにかかわっていた。

村上のことは調査員から話を聞いた。田植踊の保存会事務局を務める岡和田とき子が「復活させたい」と話しているらしい。それが12年の1月下旬。調査団が一步を踏み出してすぐの時期だった。

懸田は急いで動いた。

村上が津波と原発事故で壊滅状態に陥ったことは知っていた。「早く対応しなければ、せっかくのやる気がしぼんでしまう」と思った。

岡和田を励まし、村上の田植踊が復活する後押しをした。

復活を見守りながら、懸田はこう思うようになった。

「調査のための調査では、被災者に合わせる顔がない」

自分にできることは、と考えると懸田は文化庁と交渉する。衣装の新調や道具の修理に使える補助金制度をつくってほしい、と。やがてそれは実現、村上の田植踊復活を側面から支援した。

第14章 原発に追われたのに

懸田弘訓が補助金で文化庁と掛け合ったように、民俗芸能を続けるにはお金の問題が切り離せない。

浪江町請戸（うけど）も南相馬市の村上も、補助金で衣装や道具をまかなうことができた。だが、交通費は自己負担にならざるを得ない。全員が避難中なので、特に練習のときは集まるだけでも大変だ。そのたびに県外から駆けつける人もいる。

請戸の田植踊が復活したとき、佐々木繁子は思った。

原発のために避難させられ、交通費もたくさんかかる。時間とお金に苦労しながら民俗芸能を続けている人たちのことを、東京電力はどう考えているのだろう――。

田植踊を復活させて3カ月後の2011年11月のことだった。佐々木が住んでいた東京都江東区の避難住宅に、東電の社員がやってきた。若手と中堅の社員2人だ。

2人は賠償請求書類の書き方を教えてくれた。一通り終わったところで、佐々木は田植踊の話を切り出してみた。

「原発事故がなければ、浪江の住民は避難先がこれほどばらばらになりませんでした。みんな浪江に住んでいたはずです」

佐々木は、田植踊の存続が困難になったのは原発事故のせいだと考えていた。津波だけならまだなんとかできる。最大の困難は、原発事故で地元を追われたことだ、と。

「遠い避難先から新幹線に乗って練習や公演に向かうんです。東電さんも、少しぐらい応援してくれていいんじゃないですか？」

東電に金銭的な支援を求めるつもりはなかった。しかし、責任感だけは持つてほしかった。

佐々木の話が終わると、中堅の社員が即答した。冷たい感じだった。

「それは金銭支払いの該当にはなりません。いまはそんなことに取り組む時期ではありません。生活対応が先です」

やっぱり。佐々木はがっかりした。反論する気力もなくなった。

佐々木は12年10月、江東区から郡山市のマンションに引っ越した。

田植踊のためだ。練習は浪江町が仮役場を置く二本松市が多い。少しでも近くに、と思った。

「請戸のため、子どもたちのためにやっている。自分の代で田植踊が絶えたら、先輩に申し訳が立たない」と佐々木はいう。東電がどう思っているかは分からないが、「好きでやっていると思われたらたまりません」。

第15章 やれることをやろう

2013年6月下旬、横浜市の倉坪郁美に1通の封書が届いた。

宛先は、郁美が宮司を務める福島県浪江町請戸（うけど）のくさ野（くさの）神社。差出人は東北電力だった。請戸の住所から転送されてきた。

開封すると、中に用紙が1枚。

くさ野神社の被災状況を調べ、「電気のご契約については、安全にお使いいただくことができない」と書かれていた。結論はこうだった。

「本来、お客さまより廃止期日を通知いただき、終了させていただくこととしておりますが、避難されているなどのご事情を鑑み、5月の検針日付で電気のご契約を終了させていただきました」

いい気がしなかった。「請戸は人が住むところではありません」と、勝手に宣告された気分だった。

「本当に、請戸には戻れないんだな」と実感した。

もちろん、郁美もすぐ請戸に人が住めるようになるとは思っていなかった。だが社殿跡には小さな社が立っている。近い将来、電気を引くことだってあるかもしれない。

手紙に書かれてあるコールセンターの電話番号に問い合わせようと思ったが、「話して何になるんだろう」と思っ

てやめた。

何事もうまくいかないし、前に進まないと思う。

郁美はいまも、津波で亡くなった母、照美にあてて携帯電話のメールを打つときがある。

生前、母は何でも話せる存在だった。「メールを打つことで、少しでも悩みが薄らぐような気がして」。どうしても愚痴が多い。

現実には佐々木繁子に電話をかけることが多い。佐々木の長男、博之（41）が同級生だったこともあり、以前から親近感があった。頻度は多くないが、いつも長話になる。

佐々木が復活させた田植踊のこと、神社のこと、請戸のこと、大津波、そして福島第一原発事故――。

神社の運営については、解決の糸口が見えていない。

佐々木から「動くに動けない。郁美ちゃん、ごめんな」といわれることもある。それでも郁美にとって、話をする

ことが何よりの安らぎだ。

「そういえば、電気契約終了の封書がきた話をしていなかったな」

最後はいつも、2人でこうまとめて電話を切る。「やれることをやっていこうね」

プロメテウスの罠〔 3 2 〕 踊り残そう「子どもらに笑顔が戻った」

著 者 朝日新聞（岩堀滋）

発行所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

<http://www.asahi.com>

2013年8月23日 WEB新書版発行

2013年12月31日 EPUB版発行

©2013 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86526-113-4

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは2013年8月23日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。